

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成 27 年 6 月 2 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学霊長類研究所

職 名・学 年 特定助教

氏 名 早 川 卓 志

助 成 の 種 類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	Association for Chemoreception Sciences 37th Annual Meeting		
発 表 題 目	Genetic diversity and evolution of bitter taste receptor genes ( <i>TAS2Rs</i> ) in wild chimpanzees		
開 催 場 所	Hyatt Regency Coconut Point Bonita Springs, Florida		
渡 航 期 間	平成 27 年 4 月 21 日 ~ 平成 27 年 5 月 3 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000 円	
	使用した助成金額	300,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券代	105,330円
		現地での宿泊代	157,719円
		大会登録料・参加費	29,250円
		空港までの国内移動費(鉄道)	24,700円
		国内での宿泊代	6,200円
合計		323,199円	
	上記に充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびはご助成くださりありがとうございました。非常に物価や宿泊代が高い開催地でしたが、今回の助成のおかげで不自由なく研究集会に集中することができました。海外に人脈も非常に広がる機会となり、申請してよかったと実感しております。		

## 成果の概要／早川卓志

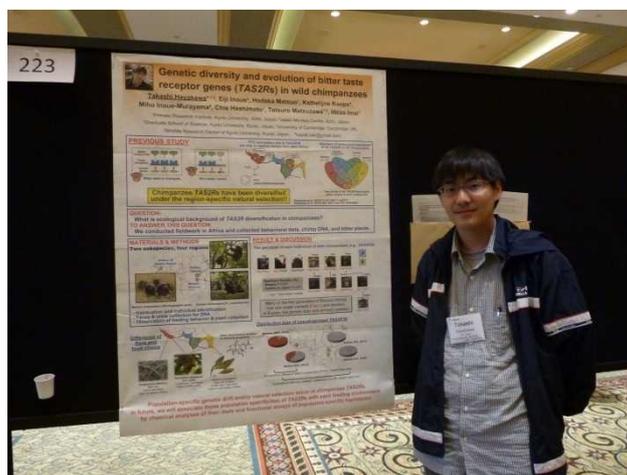
京都大学教育研究振興財団助成事業より、若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表の助成を受け、2015年4月22日から25日にかけて、アメリカ・フロリダにおいて開催された Association for Chemoreception Sciences 37th Annual Meeting (通称 AChemS) に参加した。ポスター発表を行うとともに国内外の研究者と研究交流を行った。AChemS は味覚や嗅覚などの化学感覚をテーマに研究していれば、ヒト、マウスなどの哺乳類・脊椎動物、ショウジョウバエなどの昆虫やセンチュウなどの無脊椎動物など、対象生物は問わず、また研究手法も分子生物学、神経科学、行動学、生態学なども問わない、非常に多様な世界中の研究者が集結する研究集会である。私は霊長類研究所で野生霊長類（とりわけチンパンジー）の味覚について遺伝学・進化学の立場から研究しているが、こうした多様な生物種を対象と、様々な研究手法を駆使して生物の化学感覚について研究している研究者の話聞き、交流することは、私が研究を今後どのように発展させていくかについて考える非常に有意義な機会であると考えて、本助成を申請させていただいた。

4月21日に成田空港を出発し、およそ17時間をかけて、ダラス経由でフロリダのフォートマイヤーズに同日の夜に到着した。開催地は Hyatt Regency Coconut Point という会議場付きのホテルであり、私もここに宿泊した。ホテルと会議場がセットになっているため、朝から夜中まで、滞在を有意義に過ごすことができた。実際に、プログラムも朝の8時から夜の11時まで詰まっており、休む間もなくあっという間に短いフロリダの滞在が過ぎた。一般の参加者のほとんどはポスター発表で、23日から25日の3日間の朝と夜、計6回のセッションに分けて行われた。私も最終日である25日の夜に、**Genetic diversity and evolution of bitter taste receptor genes (*TAS2Rs*) in wild chimpanzees** と題した野生チンパンジーの苦味受容体の遺伝的多様性と進化に関する発表を行った。この研究は、私が大学院生の間に調査を行ったタンザニア、ギニア、ウガンダの3カ国において収集した野生チンパンジーのDNA試料と採食食物に基づいて苦味受容体の遺伝的多様性と適応について明らかにしたものである。野生のチンパンジーや進化について研究している参加者はほとんどいなかったが、だからこそ他分野からでない気づけないコメントをたくさんいただき、とても有意義なものであった。また、これまでに何度も論文を読んだことのあるような著名な研究者の方も発表を聞いていただき、交流することができた。これは国際的な研究集会に参加できたからこそその経験と言えるだろう。日本で開催された国際学会には何度か参加したことがあったが、海外での国際学会の参加は数えるほどしかなかったので、英語を用いた研究交流のスキルアップにもつながった。

ヒトやマウスを対象に、医学や食品化学の観点から味覚や嗅覚を研究している研究者が多く、企業からの参加者も多かったが、鳥類や昆虫類などの、必ずしもヒトの理解には直結はしない動物の化学感覚の多様性と進化に関するシンポジウムも開催されており、基礎研究から応用研究まで非常に幅広い化学感覚研究の多様度を実感することができた。研究集会後は、フロリダからボストンに移動した。AChemS において鳥類における味覚研究のシンポジウム (Avian Species as a Model for Taste Detection) において講演をした Maude Baldwin 博士らと研究交流をするため、ハーバード大学を訪ねた。Baldwin 博士はハーバ

ード大学の比較動物学博物館において蜜食性の鳥類における甘味感覚の進化についての研究を行っている。比較動物学博物館が所蔵する標本や分子生物学の実験室、またフィールドステーションについて案内いただき、鳥類の味覚における種横断的な研究の最先端について学ぶことができた。私は4月から霊長類研究所に所属しながら、隣接する公益財団法人日本モンキーセンターにおいてキュレーターを兼任しているため、こうした海外の博物館でのキュラトリワークや基礎研究遂行について知ることができたのは、私の今後のキャリアを考える上で非常に役立つものであったと実感している。

5月1日にボストンを発ち、シカゴ経由で2日帰国した。飛行機の遅延トラブルがあったため、当日中に霊長類研究所に戻ることができず、東京で一泊するというアクシデントもあったが、それ以外は予定通りの滞在をすることができ、期待以上の経験が得られた。このたび渡航の機会をくださった京都大学教育研究振興財団ならびに推薦くださった霊長類研究所の今井啓雄先生に、感謝申し上げます。ありがとうございました。



ポスター発表の様子



ハーバード大学・比較動物学博物館の外観